
アレックス

深本操

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アレックス

【Nコード】

N8802G

【作者名】

深本操

【あらすじ】

ある日、突然おやじがとんでもないやつを連れ帰り、平和だった我が家が戦場と化した。これは、おれとあいつの家庭内戦争を描いた物語である（半分嘘）。

(前書き)

(3 . 3)

最初に自己紹介をしておこう。おれの名はアレックス。名字は阿部である。ちなみに、おやじは行正で、おふくろは光子という名だが、にもかかわらず、おれの名前はアレックス。

まあ、客観的に考えておかしい話ではある。おれも、自分の名前については、小さなころから常々疑問に思ってきた。しかし、なぜおれの名前だけが外国人風なのか、おれは未だにその理由を聞けていない。

もちろん、知らないとは言っても、うすうす感ずいてはいる。きっと両親とは血がつながってはいないんだろうなって。だから、今さら親の口からそう聞かされたとしても、べつにどうってことはないのだが、でもそのことが話題になった瞬間から、気まずい空気が流れそうな気がして、おれは未だにそのことを聞けていない。

ですので、その辺の事情を斟酌し、おかしい話だな、とだけ思っていたきたい。それでは納得がいかない、気になって仕方がない、という向きには、きつと複雑な家庭環境なのだな、という漠然とした認識で満足していただきたい。

事情を詳しく知らないおれの立場からは、そうとしか言えないのである。

……みたいな感じで、いきなり家庭の深いところから話しはじめてしまったが、だからといって、なにやら曰くありげな雰囲気は絶えず流れている家庭、といったわけではぜんぜんない。それでどこか、我が家はいたって安全、安泰、完全無欠の環境で、平和の極みとすらいい環境だ。

だが正確に言うなら、平和な環境だった、と過去形で言わなくてはならないのだ。

そう、あいつがきてからというものの、我が家の環境は一変したのだ。

はじめてあいつが家にやってきたときのことは、忘れようと思っても忘れられない。それほど、あいつにはインパクトがあった。なにしろ、全身毛むくじゃらな上に、何を考えているのか、玄関に四つん這いで入ってきたのだ。

おまけに、そんな訳の分らないやつを連れ帰ったおやじはおやじで、何をどう考えてそんな着想に至ったものか、開口一番、

「アレックスの嫁さんにどうかと思って」

などとのたまったのである。あまりの事態に、呆然となった。文句が喉元まででかかったが、つつこみどころがあまりに多すぎて、結局おれは何も言うことができなかった。

だが、衝撃はそれで終わりではなかった。何も言わないおれに隙を見たのか、あいつはこちらに向かって走ってくると、なんとおれの匂いを嗅ぎはじめたのだ。

ここまですると、外見がどうか、礼儀がどうかといったレベルの問題ではない。もう、その問題がどのレベルに属するものなのかすら分らない。しょうがないので、おれもあいつの匂いを嗅ぐことにした。

……今から思い返すと、たしかにおれもわるかった。冷静さに欠いていたと言っている。匂いなどを嗅いでいる暇があったら、やはり文句の一つも言うべきだったのだ。

だが、後悔先に立たず。

あいつは、なにがなにやら分からぬままに、この家に住み着くことになった。

はつきり言って、それからの我が家は戦場と化したと言っている。それほどまでに、平和だった空間が荒んだものになったのだ。

あいつをきっかけに起きた騒動は枚挙に暇がないが、中でもブタさん事件は、あいつの愚かさを象徴するエピソードとして紹介に値するものだろう。

事件は、あいつが家にやってきたその翌日に、早くも起こった。夕刻のことである。おやじが疲れた顔で帰ってきたので、おれはいつものようにブタさんをくわえると、おやじを出迎えるため玄関に向かった。

ブタさんとは、大きさはおやじのこぶし大ほどで、噛むとブーと音がするだけの代物なのだが、どうしたわけか、おやじはこれが大のお気に入りだった。おれがくわえて持って行ってやると、必ずうれしそうな顔をする。

ただ、正確に言うなら、そのブタさんそのものを好きというよりも、それを投げるのが好きらしく、おれが持っていて渡しても、すぐにそれを放り投げてしまう。拾ってきても、また放り投げる。

外で何があったかは知らないし、知りたくもないが、きっとブタさんを放り投げることでストレスを発散させているのだろう。

おやじはストレスを発散させるためにブタさんを投げ、おれはそんなおやじのストレス発散を助けるためブタさんを拾う。おやじのブタさん投げとは、そういった、深刻極まりないものなのだから、軽々しく第三者が関わっていいことではないのだが……それを、である。あいつは何を思ったのか、おやじが放り投げたブタさんをおれよりも先に拾うと、得意げな顔で逃げ回りはじめたのだ。

バカ野郎！

そう怒鳴りつけたい衝動に駆られた。怒りで、全身の毛が逆立った。

おれは何も言わず、あいつを本気で追いかけた。あいつの動きはすばやかだったが、この空間で走り回ることにかけては、おれには一日の長がある。おれはすぐに追いついた。あいつの後ろにびたりとつけ、尻尾を噛んでやろうと口を開いたときだ。あいつが突然方向を変えた。おれも反応はしたが、フローリングに足を滑らせてしまった。まずい、そう思った直後、おれは頭からテーブルの足に衝突した。

その瞬間、時間が止まったように感じた。

おれは立ちすくみ、ただ目の端で動くなにものかを、ただじっと見ていた。……鍋だ。そう認識するも時すでに遅く、次の瞬間には、落下の衝撃でぶちまけられた鍋の中身を、頭からまともにかぶっていた。

おれは、怒りとカレーで前が見えなくなったあの瞬間を、生涯忘れることはないだろう。

これが、おやじたちの間で今も語り草となっている、ブタさん事件の全容である。

思い出だけで腹立たしいが、しかし本当に腹立たしいのは、何かが起きたあとの、おやじたちの反応かもしれない。

なぜか、おやじたちは、おればかりを叱るのである。どうして騒ぎを起こすあいつじゃなく、おれなのか。

その疑問に答えるように、あるときおふくろが、いつものようにあいつを追いかけ回していたおれを捕まえて、こう言った。

「どうしてあんたは、自分のお嫁さんをいじめるの」

それを聞いたおれは、冗談ではなく、本当に失神しそうになった。すでに結婚させられている……。

いや、違う。そもそも、おれはあんなやつとは結婚しないし、できるわけがない。だってあいつは……まあ、そりゃあいつだって同じ生き物だ。大きな視野に立てば、おれたちとそうかわらないのかもしれない。っていうか、おれはどっちかかっていうと、おやじたちよりもあいつ寄り……いや、もうぶっちゃけ、おれもあいつも同じ犬だ。ここまでは百歩譲って認めてもいい。しかし、である。本当なら、こんなことは言いたくないのだが、はっきり言っておれはふつうじゃない。……いや、ふつうじゃないというか、特別……そう、特別な存在なのだ。

おれにはこのように意思があって、自我もある。人間の言葉だって分るような気がするし、新聞だって読めているような気さえするときがあるほどだ。そんなおれが、あんなやつを嫁になどするわけ

がないではないか。

ここのところだけは、早くおやじたちにも分ってもらいたいものだ。

そんなふうを考えていた私ではあるが、やがて彼女との間に子供もでき、今ではおやじたちよりも彼女たちの気持ちのほうがよく分かるようになった。

自分という存在は、自分で思っているよりも特別な存在ではないが、それを知るためには幾ばくかの時間が必要ということなのかもしれない。

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございました
┐○() ←ペコ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8802g/>

アレックス

2010年10月8日15時14分発行